

9 文学における言語論的転回

「言語論的転回」(linguistic turn)とは、20世紀における西欧の思想、哲学のパラダイムが認識から言語へと転換したことを意味する。この大きな転回に文学も巻き込まれる。文学作品に表現される意味内容は、言語の中に表出され反映されるのではなく、逆に、言語の側が何らかの意味を創出する。つまり、言語に備わっている構造が、そのシステム内で相関的に作用して意味や経験をつまり世界を形成するという見識である。

この転回の始まりは、『一般言語学講義』(*Course in General Linguistics*, 1916)におけるフェルディナン・ド・ソシュール (Ferdinand de Saussure, 1857-1913) の言説にある。言語は共時的な記号の体系である。記号は意味するもの、つまり音や図像のイメージであるシニフィアンと、意味されるもの、つまり概念や意味であるシニフィエから成り立つ。記号体系の個々の記号は他の記号との差異によって初めて意味を持ち、記号自体では意味をなさない。記号の価値はその体系内に共存する他の記号との差異による布置から決定される。その布置は人間という動物的な本能図式に基づいていないと言う意味で、**恣意性 (arbitrary)** を孕んでいる。この意味でシニフィアンとシニフィエとの間には本来のあるいは自然的な関係はない。ソシュールはこの記号の客観的言語構造をラングと呼び、実際の発話であるパロールと区別した。

構造主義 (structuralism) はソシュールを祖とした言語理論を援用して、世界のあらゆるものを記号の体系とみる。それは記号が結合されて意味となるときに依拠する深層の規則を暴こうとする。記号が実際に意味しているもの、例えば、ねこ、犬、絵画、神話などはいわゆるカッコに入れて、構造のみを抽出する。言語論的転回はこの構造主義の機運のただ中で起こった。

言語論的転回は文学にもたらされた。構造主義に大きな影響を与えたロシア・フォルマリスト (Russian formalist) は、日常的な事物の知覚の習慣化、固定化、自動化、反射化を避けるために、奇異で非日常的な言語の表象作用である「**異化 (defamiliarization)**」の手法によって、知覚の自動化を回避した。伝統的な言語体系を崩し異様なものとして提示することによって、逆に新しい知覚を得ようとした。また、**新批評 (new criticism)** は、文学テクストを社会的、歴史的文脈、さらに作者と読者からも引き離し、純粹に作品の言語のみを考察の対象とした。

文学における言語論的転回の最大の貢献は、**文学の脱神話化 (demythologization of literature)** にある。原始、言語は物事の本質を鏡のように映す「アダムの言

語」であった。しかし、言語論的転回以降、文学はそのように何らかの超越的真実、本質、魂、神話、形而上学、直観などを言葉の中に無自覚に反映しようとすることを止めた。詩には何らかの本質、魂が宿るという迷信の仮面が剥がされた。また、20世紀の戦乱と動搖、産業資本主義の弊害といった現実を、それまでの文学形態のままで作品の中で解消することはできなくなった。過去の文学はアリティイを伴わない単なるノスタルジアであると思われた。20世紀の文学はヨーロッパの偉大な人文主義の伝統の影を振り払う必要があった。それまでの文学の権威主義的、特権的特色は色褪せ、脱神話化がはかられた。このように文学は自らの神話をカッコに入れ新たな表象を獲得しようとした。

文学は言語論的転回により価値のある前進を遂げた。しかし、それは人間の主体や意図が切り離され非人称構造の機能へと還元されるという欠陥を産むことにもなった。ポスト構造主義 (*post-structuralism*) のロラン・バルト (Roland Barthes, 1915-1980) の言う「記号の文明の危機」がそれである。一つの記号表現（シニフィアン）は、一つの記号内容（シニフィエ）を厳格に結び合わせ整合的な統一をはかるのみに終始し、硬直化する。ソシュール的な意味において、シニフィアンとシニフィエとの間には本来的あるいは自然的関係ではなく、その関係性は恣意的なものであった。しかし、その関係は、言語自体のコード化と特定の文化的な約束事のシステムの中で、やがて言語の自由な恣意性がもたらした恩恵を忘れ、厳格に私たちを縛りはじめる。私たちは一つの文化、文明に閉じ込められ、人間主体の自律性とその豊かな展開を喪失する結果となった。

ポスト構造主義は一つのシニフィアンが一つのシニフィエと限定的に整合的統一を果たすとするソシュールの理論を修正する。シニフィエは限られた二つのシニフィアンの間の差異の所産にとどまらず、さらに多くの未知なるシニフィアンとの間の差異の所産もあるはずである。シニフィアンの終わりのない複雑な相互作用の自由な戯れによって、かろうじて意味は現出されると考えられる。モダニストの文学者たちは記号の文明の閉塞状態を打破しようと様々な手法を用いた。例えば、ジョイス (James Joyce, 1882-1941) は『ユリシーズ』(Ulysses, 1986) で文明や文化が硬く結びあわせたシニフィアンとシニフィエの糸を解くために、シニフィエを持たないシニフィアンを擬音という音楽的な技法を用いて提示した。文学は、閉鎖的、固定的な記号を用いながらも、それまでにない未知の意味の創造を試みることによって、新たな主体と自律の再生を探っている。

(染谷 昌弘)